

「打つ方はたいぶ慣れて手応えを掴めました。打点が1年目の倍近くになって打点王争いに加われましたし、勝負どころで打てたことは自信になりました」

1年目断トツでリーグ最多だった21失策も13個(リーグワースト2位)に減少。守備への取り組みの成果も見えた。

そして3年目の今季。期待も大きかったがシーズン前から体調不良で出遅れた。その間に前年1軍で終盤に5試合出場の若月健夫が着々と1軍の戦力として台頭。同じく同期の吉田雄人と2人で1軍キャンプに参加する中、奥浪は焦った。さらに、ファームが開幕となくとも成績は思うようにならなかった。

しかし、乗り切れない戦いを続けていた1軍で、6月には小谷野栄一が故障で離脱。そこで奥浪に3年目にして初昇格チャンスが巡ってきた。そして6月14日。甲子園で行われた阪神戦に7番ファーストで出場すると初打席で能見篤史からセンター前ヒット。3打席目にも安藤優也から同じくセンター前に弾き返し、直後に盗塁まで決めた。試合には敗れたが、オリックスファンが今季、希望を見た数少ない試合となったはずだ。そこからスタメンで12試合、代打で3試合の出場を果たし、7月18日の出場を最後に登録抹消となった。この間の成績は15試合の出場で34打数9安

打、1打点、8四死球、11三振。打率としてもファームの年間打率を上回る・265。さらに出塁率で見ると・405の数字を残した。本人は「真つすぐに空振り三振が多かった。もつと振り負けないように、コンタクトしていかないと。それにチャンスで何回もまわってきたのになかなか打てなかった」と1軍経験を振り返ったが、確かな期待感と一定の数字を残したことは間違いなかった。

それだけに戦いを見るファンとしては、チームが停滞の中、使い続けてほしい、という思いが強かったはずだ。しかし以降、シーズン終了まで1軍に再び上がることはなく、ファームでの成績は87試合の出場で打率・223、4本塁打、25打点、67三振、47四死球。9死球は上林誠知(ソフトバンク)と並びリーグトップで、上林よりも105打席少ないことを思えば抜けた多さだった。ちなみにイースタン・リーグの最多死球は岡本和真、駒月仁(西武)、井上晴哉(ロッテ)の8つ。内角攻めの多さが右の長距離砲の宿命であることが、はっきりわかる結果でもあった。

ライバルの存在と自己分析

1カ月前の1軍帯同中には刺激を受けるこんな出来事もあった。2014年11月から右ヒジ手術の影響で育成契約となっていた園

部聡が、7月に支配登録。するとすぐに1軍戦で決勝打を打ちヒーローとなったのだ。その後一旦降格となるも、再昇格の9月にはプロ初ホームランも記録。若月に続く、同期の活躍。しかも園部は奥浪同様のスラッガー系。大いに刺激となった。

「園部と僕はタイプ的にも比較されやすい。1軍にいた時もここで園部が打ったらアイツの方が上になっちゃうな、とか思いながら見ていたのはありました。ただ、ある時からは自分がレベルアップしないといけないという考えになって、後半は『来年に向けて!』という気持ちになっていました」

園部を同じ右のパワーヒッターとして、どう見ているのか。

「アイツの方が体の力が強いのは間違いない。飛ばし方というか、飛距離も力を持っていくところがある。それに比べて僕は握力も弱いし、こう見えて力ではそこまで飛ばない方



来シーズンは、持ち味でもあるこの笑顔がシーズン通して見られるか